# 女性の紀行文ー嘉永2年の宰府参り

江戸時代には交通網の整備、発達を背景に民衆の旅行が大流行し、全国の名所旧跡や寺院、神社への参詣が盛んに行われました。太宰府天満宮も天神信仰が浸透していくなかで全国から参詣に訪れる人でにぎわいを見せ、太宰府について書かれた当時の紀行文は40集ほどが確認されています。そのなかには、女性が記したものもあります。女性が紀行文を書くことは江戸時代以前には限られていましたが、江戸時代も後半になると、民衆旅行の増大と国学の隆盛による女流文芸の発達によって、女性の紀行文も多く作られるようになりました。

「不知火日記」は、遠賀郡芦屋の商家「掛屋」の主婦中西栄子（1786～1864年）が記した紀行文です。栄子は、「太宰管内志」などの編集で知られる国学者伊藤常足の門人であり、常足門下の同輩たちとともに嘉永2（1849）年2月28日から4月5日まで37日間にわたって筑前、筑後、肥後、肥前を旅しています。「いつか筑紫の国を見て廻りたいと思っていたが、今回筑前三十三ヵ所の観音めぐりをしないかと誘われたので旅に出ることにした」というのが旅の動機でした。「不知火日記」については、前田淑氏の『あしやの栄子と「不知火日記」』に詳述されていますが、ここでは栄子の宰府参りの様子について見てみましょう。

2月28日に芦屋を出発した一行は、飯塚を通過して久留米、熊本、長崎、唐津、博多の順に旅をしました。早良郡の脊振山を越えて太宰府に到着したのは出発から34日目である4月2日のことで、水城跡、苅萱の関、観世音寺を見物しています。太宰府の史跡を巡りながら、栄子は心に浮かんだ気持ちを和歌にあらわしており、水城跡では

崩れてもむかし作りし水茎の
水城のあとはふかく見えけり

と詠んでいます。天満宮へは翌3日に参詣し、「池の中に鯉・鮒・水鳥などがうち群れているのを大変めずらしく見て時を過ごした」とあり、飛梅のあたりに佇んで和歌を詠みました。

九重の庭のかをりを飛うめの
へだてぬ西のみやの玉垣

道真公を慕って太宰府まで飛んで来たと伝えられる飛梅にちなんだ一首を作り、栄子は太宰府をあとにしました。その後は、宇美八幡宮を参詣し宗像の垂見峠を越えて芦屋への帰途につくところで旅は終わっています。栄子は、紀行文の完成後の元治元（1864）年に79歳で亡くなりました。

太宰府市公文書館　太田黒　真美